

## 塩味のプリンで世界は逆転するか

大垣北高校 1年 吉川 結衣

「塩味のプリンでき、世界は逆転すると思わん？」

小学校から帰ってきたところを突然家に呼ばれて、何事かと思えばそれだった。

名案を思いついた、とでも言いたげなこの人は、ついこの間日本の真ん中から越してきた、マシヨンの隣人。もう二十歳を超えているはずなのに、心は未だに少年みたいだ。僕はその瞳の中に、彼独特の宝石のような輝きを見つける。

「何それ、凄そう。」

「やろ？ じゃあ、プリンの美味しさの秘訣って、どこやと思う？」

真面目な顔で訊いてきたので、僕なりに真剣に考えて答えを出す。僕もプリンは好きだ。

「それは……ところどころの黄色い部分と、ほろ苦いカラメルソースが、絶妙に絡み合う――。」

「甘いところやろ？」

「……。」

「でき、それなのにプリンが塩味やったら、逆やん？ やで、塩味のプリンで世界は逆転するんやろ？」

なんとなく筋が通っているような気もするが、よく分からない。そもそもなぜプリン？ 僕はこの変な人を、これからは“プリンくん”と呼ぶことにする。

「世界を逆転させて、何がしたいの？」

僕が尋ねると、プリンくんはうーんと唸って、

「岐阜に海が欲しいんやて」

とだけ言った。世界が逆転すれば、海の無い岐阜県にも海ができるのでは、とプリンくんは主張する。

「でも、世界なんて簡単に逆転しないぞよ。」

「いや、案外簡単かもしれんよ。実際に、もう逆転しかけてるし。北海道が一番暑い日があっ

たり、警察官が罪を犯したり、教師が生徒に手をあげたり。」

言われてみれば確かにそうだ。ただ、そうだとしても、その流れで岐阜に海ができるということはないだろう。だけどやってみないと分からない。だったら、僕がプリンくんのためにできることは、

「海はできないかもしれないけど、プリンなら作れるよ。」

世界逆転のための、手助けだ。

「一緒に作ろう、塩味のプリン。もしかしたら、ちょっとくらい世界が逆転するかも。」

翌日に二人で材料集めをし、早速プリンを作ってみた。塩味のプリン。海の味がするプリン。牛乳と卵と砂糖と、それから塩があればいい。思ったよりもずっと単純で、プリンくんの手際が良かったのが意外だった。前にもプリンを作ったことがあるのだろうか。

「美味し〜。」

プリンくんに訊かれて、僕は少し言葉に詰まる。出来上がった塩味のプリンは、一見普通のプリンと同じように見える。でも……。

「じょひょひょ。」

「やおね」

塩プリンにしても塩が多すぎたらしい。だけどその分確実に、海味だった。

「将来の夢はあるん？」

ある時、プリンくんが興味津々といった様子で問うてきた。一緒にプリンを作って以来、僕とプリンくんの仲はかなり深まっていた。

「……プリンくんは？ 夢はあるっ？」

自分の夢を言うのがためらわれて、同じ質問を返してみる。

「僕？ 僕は……んー、塩味のプリンで世界を逆転させること、かな」

ふふ、と笑ってしまった。プリンくんらしい。本人も笑っていた。

「でっ…君の夢はっ。」

「あるよ。……小説家。」

それを教えたのは、プリンくんが初めてだ。塩味のプリンで世界を逆転させることよりは、まだ叶いそうな夢だと思えたから。

「かつこいいやん。やったら、僕の小説もいつか書いて。なつた時でいいで。」

『プリンくんはなぜ岐阜に海が欲しいのか、なぜ世界逆転のツールがプリンなのか。その一年後くらいに聞かせてくれた。プリンくんがここに住む前、』

そんなことまで書かなくていいか。僕はバックスペースを長押しし、最後の四行を消す。

あの日の塩味のプリンで、別に世界は逆転しなかった。岐阜には今も海は無い。当然のことだ。でも、プリンくんの話を書く日が来るなんて、きつと塩味のプリンのおかげだ。

プリンくんが今どこで何をしているか、僕はよく知らない。

気分転換に、テレビを点けて昼間のニュースをぼんやりと見ていると、唐突に不快な不協和音が鳴った。この音は、決して慣れてしまわないよう、あえて不快な音階にしてあるのだと聞いたことがある。足元が歪む。生放送のスタジオでも、混乱が見受けられる。

もしかすると、岐阜に海ができるかもしれないなかった。